

ku:ne!r

坊っちゃん文学賞
大賞受賞作品冊子つき



[クウネル]
定価=680yen
2012.3.1

ストーリーのあるモノと暮らし

わたしの仕事場。

「ミナ ペルホネン」で働く人びと / ひと呼んで、街のアニキ / おかあさん3年生
出雲の祝風呂敷 / たすける手、ささえる手 / 熊本・南阿蘇のふさ切り大根
チェコ・モラヴィアのおしゃれ / 江國香織姉妹の往復書簡 / 川上弘美「大根・かぶ・豚肉」



カシュガイ族が暮らすイラン南西部の風景。遠くにザクロス山脈が見える。まるでタペストリーのような秀逸な「アートギャッペジャマール スペシャル」は、遊び抜かれた織り子さんが手がけた作品。

ギャッペは、手織絨毯の発祥の地といわれる南ベルシヤで、紀元前の昔から織られてきた数物。なかでもウールの質やデザインがとくに優れた最上級のものをだけを「アートギャッペ」と呼ぶ。イラン南西部、標高2000メートル以上の高地で遊牧しながら暮らすカシュガイ族の女性たちが、代々そのギャッペ織りを受け継いできた。女の子は16歳くらいになると母から織り方を習い始める。きちんとした品質のギャッペを織ることがお嫁にいくための必須条件でもあるそうで、嫁入り道具にするギャッペを自分の手で織るのがこの地域の慣わしだ。

結婚するとき、子どもが生まれたとき、テントを新調したとき。そんな人生の節目ふしめで、幸福への願いを込めて織られるギャッペには、ひとつとして同じものはない。アートギャッペ選定人の今井正人さんは、毎年2〜3回現地を訪れてギャッペの品質やデザインを一点一点評価し、買い付けている。今井さんは、一枚の絨毯からさまざまな想像をかきたてられるギャッペの世界に引き寄せられて、イランへ足を運ぶようになったという。

「初めて訪れたとき、女性たちがみんな楽しそうに笑い合ったりしながら織っているのを見て、いい光景だなと思いました。強いられる仕事ではなく、彼女たちの生活の営みとして息づいているものなんです」

数か月から1年という長い時間をかけて織るから、ギャッペには織り子さんがその時々願うことや感情のゆらぎが素直に表れる。「たとえ

ば同じラフスケッチを何人かに渡して織ってもらっても、それぞれまったく違うデザインのもので仕上がってくるでしょう。そういう、機械織りでは出せない人間味がアートギャッペの魅力」。



カシュガイ族には、女性はいつも美しく装うという決まりがある。おしゃれ心がアート性の高いギャッペを生み出すのかもしれない。

それは、一枚の絵のような。

家族のしあわせを願うシンボルや目に映る大地と空の風景が織り手一人ひとりの感性で表現されるアートギャッペ。遊牧民の女性たちが祈りを込めて織る天然素材の絨毯です。

写真：増田智恵 文：奥澤彩 ヘアメイク：草場紗子

モチーフにも特別な決まりごとはない。高地の風景を写しとる人もいれば、藍色のグラデーションで夜空を描く人もいる。長寿と健康のシンボルとして古代から伝わる「生命の樹」や、家族円満を願う鹿、子宝を意味する人の柄もよく使われる。

「共通しているのは、色への強い憧れが感じられるものが多いこと」と今井さん。カシュガイ族が暮らすのは、見渡すかぎり砂と土で覆われた乾燥地帯。色彩を補うように、ギャッペには夕焼け色や木々の緑に染められた鮮やかな糸が織り込まれる。アートギャッペと認められる高品質なものはすべて天然の染料、おもにアカネ、ウコンといった植物の皮や根が用いられていて、やさしい素朴な色に染まる。そのせいか、風土も文化もまるでちがう土地で作られたものなのに、日本の家の板材や畳にもしっくりなじむ。

新潟市の今井さん宅では、さまざまなアートギャッペが活躍中。子どもたちは「絨毯といったらギャッペのことだと思ってる」ほど生粋のギャッペ育ちだ。記念すべき一枚目が家にきたとき、素足でごろんと寝ころがる気持ちよさを真っ先に感じとったのは、まだ小さかった長男。「やっぱ子どものほうが、天然素材の心地よさに本能的に反応します。ギャッペは50年、100年と使いな



しあわせを運んでくる神の使いと信じられている鳥や、人のモチーフ。個々の色彩感覚で好きな柄を織り込む。



ちょっと北欧のテキスタイルのようにも見えるモダンな柄。明るい黄色はワゴン（ターメリック）の色。



色を多用した抽象画のような柄も人気。値段も手頃な正方形の座布団サイズは、何枚あっても困らない。



生命の樹を凝ったあしらいで表現したハイレベルな作品。茶色のグラデーションは染色ではなく羊の原毛の色。



絵本のように物語を感じる一枚。簡単なラフ画をもとに、織り子さんそれぞれの感性で織り上げる。



鹿（家族円満）、生命の樹（長寿と健康）などの伝統モチーフを配したデザイン。インディゴの青がアクセント。

がら風合いを育てていくものだから、ものを長く大切に使うことも学べるはずです」

使えば使うほどいい表情になっていく上質なギャップベには、羊の毛に含まれる脂肪が適度に残っていて、コーティングのような効果がある。手入れのしやすさについては、今井さんの妻も太鼓判を押す。

「長男が豪快にココアをこぼしたことがあって、どうしよう！と慌てたけれど、それも味になるといふか、いやな感じのシミではないから、まあいいかって。ゆったり、おおらかな心持ちで使っています」

今井家でのふだんの掃除は、目に沿ってホウキで掃くだけ。目がぎゅつと詰まっていたら、ホコリが奥まで入りづらいうからだ。また、直射日光が当たっても化学染料のように急激に色褪せてしまう心配がなく、天日干しできる。調湿効果にすぐれた高地の毛質のおかげで、夏でもひんやりと気持ちいいのは意外だった。

「子どもたちが果立つときは、この家のギャップベを一枚ずつ持たせるつもり。小さなシミを見るたびに、家族を思い出してくれたらなあ、なんて思い描いているんです」

作り手の祈りが、それを手にした人の人生へとつながる不思議。遠く7000キロも離れた土地で織られたギャップベは、旅するように親から子へと使い継がれる。



裸足でべたべた、寝ころがってリラックスするのがアートギャップベの正しい使い方。天然素材なのでアレルギーが心配な子どもの肌にもやさしく、静電気も起きにくい。日本人の生活スタイルに合う。